

同時通訳における照応関係の構築

～指示表現「そういう」をてがかりに：認知語用論的観点からの統一的説明～

南津佳広

(大阪府立大学大学院 博士前期課程)

In this paper, we discuss what information a simultaneous interpreter adds by inserting Japanese demonstrative pronoun "souiu", and claim that its fundamental function is to mark the following noun (phrase) as reformulation of its antecedent. Although most existing accounts of demonstratives in interpreting and translation only deal with the case in which antecedents are identified by the degree of cohesion and talk about the equivalent to be achieved between SL and TL, some demonstratives, like bridging reference in English, do not contribute to cohesion in the source language. In our theory the notion of securing meaningfulness (Funayama 2000) plays a crucial role. Furthermore, using, as a point of departure, Gutt's definition of translation as interpretation of interpretation, we will define simultaneous interpreting as a kind of metarepresentation from a Relevance-theoretic viewpoint. We will argue that the kind of "souiu" inserted by the interpreter is better analyzed as encoding procedural information, guiding his/her hearer to identify the antecedent.

1. はじめに

同時通訳とは、原発言のメッセージを忠実に理解できた順に、早い段階で変換訳出することを基本とした言語行為である。その観点からすると、同時通訳はオンラインの発話理解を言語化したものともいえる。英日の同時通訳を聞いていると、「そういう」という訳出表現をしばしば耳にする。この「そういう」はそれぞれ「そう」と「いう」から構成されており、「そう」は指示表現で、「いう」は実質的には意味をもたない、

MINAMITSU Yoshihiro, "A Cognitive-Pragmatic Account of Demonstratives in Simultaneous Interpretation -- the case of *souiu*." *Interpretation Studies*, No. 2, December 2002, pages 43-62.

(c) 2002 by the Japan Association for Interpretation Studies

いわゆるつなぎことばの働きを持ち、「そういう」全体で前方照応の指示表現となる。ところが、同時通訳データを細かく観察していると、原発言には照応関係がないにもかかわらず、同時通訳者は「そういう」と訳出して、照応関係を構築している例が意外と数多く見受けられる。(1)を見ていただきたい。

(1)

E 0404 to take the place of the legislative branch of government; that they're

J 0404 相手と違う点です。私は、判事は、そのまるで 立法府のような役割をしては

E 0405 appointed for life, and that they ought to look at the Constitution as

J 0405 ならないと思います。彼らは 憲法というのは、神聖なものであると見るべきあり、

E 0406 sacred. They shouldn't misuse their bench. I don't believe in liberal, activist

J 0406 自分達のその権限を濫用してはいけません。私はリベラルな

E 0407 judges; I believe in strict constructionists, and those are the kind of

J 0407 活動派判事、そういう人を信じません。そうでは わ、

E 0408 judges I will appoint. I've named four Supreme Court judges in the State of

J 0408 なくて、もっと 建設的に できるような 判事です。

E 0409 Texas, and I would ask the people to check out their qualifications, their

J 0409 例えば テキサスでも その通りにして 判事を選びました そして

E 0410 deliberations. They're good solid men and women who have made good

J 0410 判事に対しては、そういう人を選ぶ時には、その人の、その し、資格

E 0411 sound judgments on behalf of the people of Texas.

J 0411 それをしっかりと審査します。健康な考え方をしている

E 0412 [L]: What kind of appointments should they expect from you, Vice President Gore?

J 0412 そういう男女、判事です。 [L]: あなたはどのような方を

(1) では、原発言中には照応関係がないにもかかわらず、日本語の「そういう」が訳出表現に挿入されている。ここで、疑問が生じる。なぜ同時通訳者は「そういう」という照応関係を構築して訳出しているのだろうか。そこで本稿では、上記の問題を

解決すべく、このように通訳者が独自に構築した照応関係での「そういう」を手がかりに、認知語用論的観点から同時通訳における訳出表現における結束性の維持に関する一側面について、船山（2000）のいう「有意義性」が同時通訳においてどのように確保されるのかを検証する。この視点はさらに、同時通訳における指示表現一般についても統一的な説明が可能であり、その同定プロセスも有意義性の確保によって保障されるという提案を試みる。本稿で検証する同時通訳データは、船山他（2002）より『第1回米大統領選討論会』（2000年10月4日：NHK BS-1）を採用した。なお、スクリプトはそのままの形式で引用することにする。

2. 先行研究

通訳における原発言と訳出表現のずれに関する諸問題は、さまざまな側面から数多くの研究が行われている。極めて厳しい時間の制約中で、言語の線状性の制約 (linearity constraint) や、起点言語 (source language: SL) 目標言語 (target language: TL) の関係において不可避免的に生じるテキスト構成のずれから、圧縮や合成などが頻繁に行われていることは周知のとおりである (小倉・三島 1999、西村 1999 など)。ところが、同時通訳者が独自の判断を下し、一方的に付加的な訳出表現を挿入することについての系統的な研究はまだ数が少ない。船山（2000）は特に、原発言にはない照応関係が訳出中に打ち立てられている点に関して次のように示唆している。

- (2) 訳語の選択が『縦』の関係で決まるのではなく、訳文中という『横』の関係が通訳者頭の中に存在する (船山 2000 : 14)

そこで本章では、まず、本質的な問題となる通訳における指示表現とその解釈についての機能的通訳・翻訳論の先行研究をいくつか概観し、その問題点を簡潔に指摘する。

言語機能の観点からの通訳を分析するにあたって、通訳者が直感的に SL と TL の談話価値 (discourse value) を維持する要因として、言語化された情報構造 (information structure)、焦点構造 (focus structure)、結束構造 (cohesion)、結束性 (coherence) などがあげられる。

Lotfipour-Seadi (1997) は翻訳における機能的等価の観点から、語彙的結束構造 (lexical cohesion) が認知効果 (cognitive effect) を左右するので、翻訳における談話価値を維持するには、SL における語彙的結束構造を TL においても遵守することであると述べている。例えば、照応表現の場合、SL における指示詞がどの先行表現を指すかを TL でも表さなくてはならないことになる。では (3) の場合はどうか。

- (3) John worked in England before moving to Hong Kong 5 years ago. The humidity didn't bother him. (Wilson & Matsui 1998 : 177)

これを日本語に訳す際に問題となるのは、“The humidity”が何を指すかである。焦点構造に基づき、情報の「重要度の高い中でもよりいっそう重要度が高い項目」(水野 1999 : 57) が焦点となり先行詞になるのであれば、“The humidity”が指すのは“England”ということになろう。ところが実際は、聞き手がどちらを指すと解釈したのかを調査したところ、40%の人が“England”と答えたのに対し60%が「香港」と答えた調査結果が出ており、文の焦点構造のみに依拠して聞き手が解釈していないことがわかる (Wilson & Matsui 1998)。

このように、先行詞を明確に同定できない原文の機能的等価を訳文で達成することは難しいと思われる。つまり、焦点構造や情報の重要度に基づいてテキスト構成における等価を達成させるという視点には限界があるとうことになる。

また、英語の「the+名詞」と似たような働きをする日本語の「その+名詞」は、会話において相手が導入した情報を同定するだけでなく、話し手自身が直前に導入したものを指し、抽象的な名詞を後続させることもあることは研究者の間では一般的なものとなっている。秋月 (1997) は、英日翻訳における「その」が何を同定するのは、呼び出し可能性 (accessibility) と「相手の利益を最大限にする」(秋月 1997 : 62) というポライトネス・ストラテジー (politeness strategy) によって決まるという。呼び出し可能性は、先行詞の候補となり得るものすべてを列挙する。だが実際に先行詞の同定を行う際には、どの候補を先行詞として取捨選択するかは、ポライトネス・ストラテジーによる判断だけでは考えにくい。なぜなら、発話は常に相手にとって最大の利益をもたらすものが保障される可能性は極めて低く、また、話し手が想定する最大限の利益が、聞き手にとっての最大の利益である保証も無い。よって呼び出し可能性、つまり情報処理の容易さという観点とポライトネスに基づく分析でも限界があるということがわかる。

Чернов (1987)は、照応関係における先行詞の同定は原発言のテーマ・レーマ構造に基づいていると主張する。このテーマ・レーマ構造では、文末に近づくほど、同時通訳者の確率的予測 (вероятностное прогнозирование) が高められ、高次の意味的単位を構築する指摘している。その単位から記憶に蓄えられた知識から、または、先行する文脈から指示表現の先行詞を同定したり、その反対に、冗長性を排除した指示関係を構築することが可能であるという。ここでは、先行詞を同定する際にその候補を却下するための基準が設定されていない。また、処理の容易さから考えると、たいていの先行詞はテーマの中に存在することは予測がつくものの、もし先行詞の候補が見つからない場合には、その意味的単位の構築が限りなく行われるという問題点が生じる。

このことから、通翻訳における先行詞とその同定に関しては、言語機能のアプローチでは限界があり、周辺的な問題に対応できないことがわかる。

3. 関連性理論

ここで本稿では、認知語用論の中でも Sperber & Wilson の関連性理論 (Relevance Theory) を新たに導入する。この関連性の枠組みから発話理解の手順に従って分析することが、どのような意図を持って同時通訳者が照応関係を訳出表現として構築するか、どのように照応表現を理解するのかについての統一的な説明をもたらすものと考えられる。そこで、まず本章では関連性理論について簡単に概観する。

関連性理論では、発話はその伝達意図すべてを言語化していないという言語情報の不十分性 (linguistic underdeterminacy) を前提とし、明示的発話内容の理解にも、文脈に依存した情報による推論の必要性を訴える。その発話理解のプロセスは、まず関連性を求めた認知の原則 (4) によって、一連の音声表示を解読し、論理形式 (logical form) を持ち真偽性の判断が可能な概念的意味 (conceptual meaning) と真偽性には関与しない手続き的意味 (procedural meaning) を導出する。

(4) [Cognitive Principle of Relevance (認知に関する原則)]

Human cognition tends to be geared to the maximalization of relevance. (人間の認知は、最大の関連性を得られるように働く傾向を持つ) [(Sperber & Wilson 1995: 260)]

そして認知の原則の下位モジュールとして位置づけられる伝達の原則 (5) に従って、話し手は聞き手の注意を引くに値する最も関連性の高い表象を構築して伝達し、聞き手はその表象を最も関連性の高いコンテキストの中で処理する語用論的推論を行う。

(5) [Communicative Principle of Relevance (伝達に関する原則)]

Every act of ostensive communication communicates a presumption of its own optimal relevance. (すべての意図明示的伝達行為は、それ自身の最適な関連性の見込みを伝達する) (Sperber & Wilson 1995: 260)

この最適の関連性 (Optimal Relevance) は以下のように定義づけされる。

(6) [Optimal Relevance (最適の関連性)]

An utterance, on a given interpretation, is optimally relevant iff: (ある発話が理解に際して最適の関連性を持つのは)

- a) It is relevant enough for it to be worth the addressee's effort to process it; (その発話が聞き手にとって、処理するために労力をかけるに値するほど関連性があるとき)

- b) It is the most relevant one compatible with the communicator's abilities and preferences. (その発話が、伝達者の能力と嗜好を合わせてみて、もっとも関連性があるとき) (Wilson & Matsui 1998: 189)

この関連性は認知効果 (cognitive effect) と処理労力 (processing effort) の相互調整によって定義づけされる。そして聞き手は最適な関連性を求めて話し手が意図した発話解釈を得るために解釈仮説を立てる。そこで関連性に基づく発話理解の手順をまとめると以下のようなになる。

- (7) a. 聞き手は、呼び出し可能性 (accessibility: 最小限の労力で痕跡を追うこと) の高さにしたがって認知効果を考慮する。
b. 期待するレベルの関連性が得られた、つまり語用論的に容認可能となった時点で解釈を終了する。

この語用論的推論プロセスでは、一義化 (disambiguation)、意味充足 (saturation)、そして富化 (enrichment) が行われ、表意 (explicature) と推意 (implicature) を導出する。特に、表意は一次表象となる表出命題 (proposition expressed) と命題態度などメタ表象 (metarepresentation) の一部をなす高次表意 (higher-level explicature) から構成される。

この手順に従えば、(3) にあげた照応の解釈についても、聞き手ははじめの文を聞いて、「話し手がなぜそのようにじめじめしたところにいたのか、その理由を次の発話で与えられる」と認知効果を特定化した結果、その期待を満たすことが主な動機付けとなり、聞き手はトップダウン的に解釈仮説を立てると思われる。その結果、解釈で必要とされる処理労力を最小限に抑える必要性が生じる。このように、関連性の枠組みでは、機能の観点から説明できなかつた現象も、明示的発話内容（ここでは特に照応の解釈）、文脈情報、認知効果を同時並行的に相互調整したものとして簡潔に説明することができる。

本稿では、同時通訳においてオンラインで表象を構築すると同時に原発言の発話意図を理解することが重要な問題となる。そこで次章では、統一的な説明に向けて、関連性の枠組みにおける表象の構築と同時通訳の関係に着目する。

4. 統一的説明に向けて

前章では、関連性理論を簡潔に概観し、それが日常会話における照応関係では周辺的とされる連想照応の説明にも適応可能であることがわかったが、ここでは関連性がいかに意味不十分性を解決するのか、新たなメタ表象という概念に注目して分析をすすめ、Guttに基づきその概念が通翻訳にも応用できるということを提案していく。

ある風景を記念におさめたいと思ったとき、写真をとるか、スケッチをして描写するか、または解釈的に戯画にしたりするものである。その方法によって構築する表象（ここでは写真やスケッチなど）は描写的なものであったり解釈的なものであったりとそれぞれ異なる。これと同様に、発話にもある事象を描写している側面があることはよく知られているが、思考や発話を解釈しているという側面もあると Sperber & Wilson は指摘する。そこで前者を描写的用法と呼び、後者は解釈的用法という。先にあげた風景とそれを対象にした表象の関係をみてもわかる通り、どの表象もそのもととなる風景とは、程度の差はあれ類似しているものである。このように関連性理論の枠組みでは、人間が構築する表象とその対象となるものとの間に、程度差のある類似的関係を認める。特に、すべての発話は思考やその他の発話を解釈したものであり、それは解釈的類似性によって特徴付けられているという (Sperber 1996, 1997, 2000; Wilson 2000, Noh 2000)。

4.1 解釈の解釈 (interpretation of interpretation) という概念

本節では特に、発話の解釈的用法に注目する。もととなる思考や発話と解釈的用法の発話には、論理的・命題形式の点で類似関係にあるだけでなく、言語形式の点でも類似関係にある。その典型的な言語形式の類似的関係にあるのが直接話法である。

(8) 太郎：今日の天気予報では何と言った？

花子： a. 午後からぐらつくって。

b. 午後からぐらつく。

(8a) では花子は明示的に気象予報士が述べていたことを伝えていると太郎は解釈すると思われる。終助詞「って」が伝達をあらわす明示的なメタ表象 (overt metarepresentation) である。では (8b) を太郎はどう解釈するか。ここでは、花子は気象予報士が述べたことを忠実にあらわすことを意図していると解釈するのが妥当であろう。これを非明示的なメタ表象 (inferred metarepresentation) という。このように、メタ表象が明示的あるいは非明示的にせよ、メタ表象は一次表象となる表出命題を (8a) の太字部分に示してある通り、高次表意がはめ込むかたちをとる。

(9) A metarepresentation is a representation of a representation: a higher-order representation with a lower-order representation embedded within it. (メタ表象は表象の表象である。つまり、高次の表象がそれ以下のレベルの表象をはめ込むかたちをとる) (Wilson 2000 : 411)

関連性理論の枠組みにおける発話理解では、メタ表象は関連性を期待する度合いによ

って獲得される。特に (8b) では、花子は太郎の問いに答えると予測することが最も関連性が高く呼び出し可能性が高い。そこで、太郎は語用論的操作を行い、富化する。花子は気象予報士に帰属する発話を忠実に伝えていると解釈して「と言ってたよ」などがメタ表象されると推論し、(8a) と同じ表意を得るのである。この解釈が、太郎にとって語用論的容認可能性が高く、最適な関連性をもたらすと説明する。

このメタ表象による発話理解のメカニズムは、通翻訳にも適応することが可能である。Gutt (1990) は翻訳を発話の 2 次レベルの異言語間解釈的用法 (interlingual interpretive use) と位置づけ、類似の程度によって直接的/間接的 (direct/indirect) という 2 つのレベルを設定している。

- (10) ...indirect translations simply interpretive use between stimuli from two languages; direct translation, on the other hand, is the special case of the interpretive use that creates a presumption of complete interpretive resemblance between stimuli from two languages. (Gutt 1990: 161) (…間接的翻訳とは、両言語間の刺激における解釈的用法そのものである。その一方で直接的翻訳とは、解釈的用法ではあるが、両言語間からの刺激における完全な解釈的類似の見込みを構築するものである)

Gutt は、原文が伝達しているメッセージ、つまり想定 (assumption) を関連性の発話理解のストラテジーによって理解し心的表象 (mental representation) を構築すると述べている。この心的表象は解釈的側面と描写的側面を持ち、前者には原文に帰属している表象と翻訳者が望ましい (desirable) と判断した表象で構成され、後者は現実世界の事象を表象したものと翻訳者が望ましいと判断した表象とで構成されるとしている。基本的には同様のことが通訳にもいえる。だが、同時通訳を解釈的用法と位置づけるに当たり、同時通訳と翻訳の性質の違いを考慮する必要がある。次節ではそのあたりを取り上げて、メタ表象としての同時通訳の概観を提示する。

4.2 同時通訳における解釈的用法 (interpretive use) と有意義性 (meaningfulness)

同時通訳とは通訳者が原発言を解釈して訳出し、その訳出表現が原発言に帰属する発話であることを聞き手に理解させる性質を持つことは翻訳と同じである。しかし、同時通訳と翻訳における通訳者の原発言 (文) の理解には大きな違いが生じる。まず、同時通訳では特に、センテンス全体を聞きとってから原発言者の伝達意図を理解するのではなく、原発言を聞いて、少しでも理解したと判断できた単位ごとに訳出さなくてはならないため、言語の聴取と産出が常にオーバーラップしている。このため、発話理解が曖昧な箇所については原発言者に説明を求めるように聞き返すことができないだけでなく、不明瞭な訳出に関しても再度説明することができない。また、認知

資源の違いにも着目しなくてはならない。関連性理論では、解釈仮説をうち立てるために用いる認知資源は、言語などの聴覚刺激やスキーマ・フレームなどの記憶だけではなく、視覚的刺激などもあるとされ、翻訳においても Gutt はその認知資源を大筋で認めている (Carston 1997; Gutt 1990, 1998, 2000a, 2002b; S&W 1986, 1995; Wilson & Matsui 1998, etc)。ところが、同時通訳の訳出表現は、原則的に原発言者に帰属したものとなるため、その認知資源は原発言や同時通訳中に生じる暫定的文脈、つまり、関連性でいう ad-hoc concept が中心となる。そこで、同時通訳における発話解釈には、有意義性 (meaningfulness) という制約がかけられることになる。同時通訳では、ad-hoc concept に基づいて有意義性を補償ような解釈を求めて打ち立てた解釈的仮説をもとに訳出をすることで、認知効果を高めるものである。

(11) 有意義性確保の原則 (Principle of Securing Meaningfulness)

通訳者は、自分の訳を構成する表現がすべて有意義なものであるようにする。

(船山 2000:5)

また、有意義性は関連性理論における発話理解の補償を担うモジュールであり、人格的 (personal) な特性を持つと考えられる。このモジュールの存在により、同時通訳者が主観的に判断して訳出をした表現も、語用論的に容認可能なものとなるのである。そして、原発言と訳出表現の解釈的な類似性は、有意義性を確保することによって論理的・文脈的含意の類似の度合いは補償され、より高いものとなる。このような理論的枠組みをもとに、次章では実際の同時通訳データを使い、検証していく。

5. 「そういう+名詞(句)」の分析

本章では、実際に同時通訳者が独自の判断で構築した「そういう+名詞(句)」の照応関係を実際の同時通訳データを使い具体的に分析する。そこで、「そういう」を以下のように定義できるものと仮説を立てる。

- (12) 「そういう」は後続する名詞(句)が、先行文脈から呼び出し可能度の高い概念表示を再構築、もしくは詳細化したものを指すことで、語用論的に容認可能な解釈を聞き手にさせるために、推論に制約をかける手続き的情報を言語化したメタ表象である。

これは先行する訳出表現を有意義性確保の原則に基づき補償するものであり、聞き手は処理労力を減らし、関連性を高めつつ有意義性を確保する。

これら同時通訳における指示表現の語用論的理解のプロセスも、関連性の発話理解の手順に従い、明示的発話内容と文脈情報、認知効果の複数同時的な相互調整

(parallel, mutual adjustment) ということができる。特に同時通訳の場合、その文脈情報は同時通訳において構築された Carston (1996) のいうアドホックな概念 (ad hoc concept) が中心となる。

以下、同時通訳者が独自の判断で訳出した「そういう＋名詞（句）」を実際の同時通訳データに基づき分析する。なお、データの選択には同時通訳者の訳出フローに人間のオンラインの言語理解が反映されているものを選択するように最大限注意した。

5.1 名詞(句)を指す「そういう」

指示表現の理解では、対象となる先行詞の要素が名詞（句）か命題かの2つに大きく分けられる。ここではまず、名詞句が先行表現の場合を取り上げる。この場合、さらに coreference と loose reference の2つに下位分類される。

5.1.1 Coreference

(13)

E 0404 to take the place of the legislative branch of government; that they're

J 0404 相手と違う点です。私は、判事は、そのままで 立法府のような役割をしては

E 0405 appointed for life, and that they ought to look at the Constitution as

J 0405 ならないと思います。彼らは 憲法というのは、神聖なものであると見るべきであり、

E 0406 sacred. They shouldn't misuse their bench. I don't believe in liberal, activist

J 0406 自分達のその権限を濫用してはいけません。私はリベラルな

E 0407 judges; I believe in strict constructionists, and those are the kind of

J 0407 活動派判事、そういう人を信じません。そうでは わ、

E 0408 judges I will appoint. I've named four Supreme Court judges in the State of

J 0408 なくて、もっと 建設的に できるような 判事です。

ここでは J0407 の「そういう人」に相当する照応関係は、原発言には見当たらない。原発言では E406-7 にある通り “I don't believe I liberal, activist judges” である。原文の通りに訳すのなら、「そういう＋人」は必要ない。ところが、通訳者がわざわざ「そういう」を言語化しているのは、「そういう」に後続する名詞「人」をより際立たせることを意図しているのであろう。この「そういう」は、直前の「リベラルな活動派の」を指すと考えられる。この「リベラルな活動派の判事」であると聞き手が解釈できるように、「そういう」を用いることで、聞き手に発話解釈を容易にさせ、関連性を高め

ながらも有意義性を確保しようとする通訳者の意図が働いていると考えられる。

(14)

E 0881 And I have been willing to stand up to powerful interests, like

J 0881 闘ってきたのは中産階級の人たちの為であります。

E 0882 the -- the big insurance companies, the drug companies, the HMOs,

J 0882 私は 例え大手の保険会社や 大手の製薬会社が

E 0883 the oil companies. They have good people, and they

J 0883 それから HMO や大手の石油会社が そうい

E 0884 play constructive roles sometimes, but sometimes they get too much power.

J 0884 所にもいい人たちはいますし時には建設的な役割もしますけれども、

E 0885 I cast my lot with the people even when it means

J 0885 時にはあまりにも大きな権力を彼らは手に持ち過ぎている。 そういう権力に対して

E 0886 that you have to stand up to some powerful interests who are trying to turn

J 0886 中間層を守ろうとして 来たのです。そして人々には そういうよう

E 0887 the the the policies and the laws to their

J 0887 な巨大な力を持っている人たちには立ち向かわないといけ

E 0888 advantage. That's --- you can see it in ---in this campaign. The big drug

J 0888 ないときがあると、そして、

J0885 で用いられている「そういう権力」に対応する照応関係も原発言には見当たらない。ここでも「そういう権力」をわざわざ訳出したのは、「権力」をより際立ったものにさせようという通訳者の意図が働いているからであり、聞き手には「そういう」が E0885 の「あまりにも大きな権力」を指すように促し、大手企業などに集中した権力と中間層の人々との対比を明確にすることで関連性を高め、有意義性を確保しようとする通訳者の意図が伺える。

5.1.2 Loose Reference

co-reference とは異なり、先行文脈中に「そういう」に相当するものが複数あり、

それを後続する名詞（句）がひとつの概念にまとめているような指示関係を loose reference と呼ぶ。

(15)

E 0044 [G]: Yes, Jim. I said that his tax cut plan, for example, raises the

J 0044 それは政策の違いのみについてののみですか。[G]: そうということです。彼の減税案ですけれど

E 0045 question of whether it's the right choice for the country, and let me give

J 0045 も、これは色々疑問がありますね。実際に正しいチョイスなのかこの国に

E 0046 you an example of what I mean. Under Governor Bush's tax cut proposal, he would

J 0046 とって私は疑問に思います。例えば例を取ってお話しましょう ブッシュ氏の減税案を見て

E 0047 spend more money on tax cuts for the wealthiest one percent than all of the new spending

J 0047 みますと、そのもとに彼は豊かな人のため、この国の豊かな 1% の

E 0048 that he proposes for education, health care, prescription drugs and national defense all

J 0048 ために減税をするんですね。それは教育やそれから医療、お、それから処方薬そして国防、

E 0049 combined. Now, I think those are the wrong priorities. Now, under my

J 0049 そういうものに使うお金よりもずっと大きい価格になるわけです。これは私は優先

J0049 の「そういう」に相当する照応関係は原発言では見当たらないが、「そういう」の先行詞に相当するであろうと思われるものは、それぞれ E0048～E0049 における “education”, “health care”, “prescription drugs” そして “national defense” の 4 つの名詞である。これらをまとめて「もの」という名詞を使い、上位概念化を行うことで一般的な概念へ集約している。ここで同時通訳者が聞き手に敢えて再構築を促すことで、ブッシュが行おうとする減税額がいかに大きなものであるのかを際立たせ、原発言の解釈の関連性を高めつつ、有意義性を確保しようとしている通訳者の意図が伺える。(16) についても同様のことが言える。

(16)

E 1032 borrowing; it would borrow up to \$3 trillion. Now, Social Security has never

J 1032 ませんね。 そうなれば、基金は、いろいろと借入れを始めればいんだと、30 兆を

E 1033 done that, and I don't think it should do that. I think it should stay in a lock

J 1033 借り入れていけばいいというわけなのでしょうが、そういうことを社会補償基金はやった

E 1034 box. And I'll tell you this: I will veto anything that takes money out

J 1034 ことはなし、してはならないと、社会補償基金* には、

E 1035 of Social Security for privatization or anything else other than Social Security.

J 1035 手をつけてはならないということです。例えば民営化だとか、そういうことのために

E 1036 [L]: Governor? [B]: Well, I thought it was interesting that in the two minutes,

J 1036 向かっていってはいけないのです。[L]: 知事どうぞ。 [B]: まあ、しかし、

E 0888 advantage. That's --- you can see it in ---in this campaign. The big drug

J 0888 ないときがあると、そして、

ここでも、J1035 の「そういうこと」に対応する照応関係は原発言では見当たらない。「そういうこと」が指すのは、一見すると訳文の直前にある「民営化」のように思われるが、実はここでは E1036 の “anything else other than Social Security” にあたると考えられる。原発言では E1035 で “privatization” と具体的なものを出しており、そのあとに接続詞 “or” が続くので、そのほかの具体的なものを普通は予測するものであるが、漠然としたことを述べる “anything else...” がきている。だとすれば「その他いろいろ」などのような訳出表現をするはずだが、ここでなぜ通訳者が「そういう」と訳しているのかという疑問が生じる。それは、この “anything else other than” を聞きとった時点で、“anything that takes money out of Social Security for privatization” と同じことを結果的に述べていることを通訳者が理解したからであり、関連性でいう concept loosening をしつつも、代用表現を指すように聞き手に文脈の選択を促す「そういう」を用いたと考えられる。

(注：J1034 の * に関して、引用もとでは「社会補償」となっていたので本稿ではそのまま引用したが、正しくは「社会保障」である。ここに訂正しておく。)

5.2 命題を指す「そういう」

「そういう」が先行する命題を指す場合は、後続する名詞の種類によって ad hoc reference と summing-up reference の 2 つに分けられる。前者の名詞（句）には関連性のいう概念的意味としての集約的な一般性がなく、後者はその反対である。

5.2.1 ad hoc reference

Carston (1996) ではアドホック概念 (ad hoc concept) について述べている。これは言語化された表現が字義通りの概念ではなく、関連性の原則によって先行文脈との相互作用によって特定化 (concept narrowing) や一般化 (concept loosening) された、その文脈に限定された概念のことをいう。

(17)

E 0471 [B]: Well, I'm pleased with the results of the election, as the vice

J 0471 私は選挙の結果

E 0472 president is. It's time for the man to go, and it means that the United States

J 0472 を喜ばしく思っております。本当にあのミロシェビッチ氏は、去るべきとき退陣すべき

E 0473 must have a strong diplomatic hand with our friends in NATO. That's why

J 0473 ときなんです。ということは アメリカは、非常に強い外交的手腕を

E 0474 it's important to make sure our alliances are as strong as they possibly

J 0474 我々 NATO の友人達に見せなくてはならない。つまり我々の同盟は

E 0475 can be to keep the pressure on Mr. Milosevic. But this will be an interesting

J 0475 非常に強いんだと、これだけでも強いんだと ミロシェビッチ氏に見せて、

E 0476 moment for the Russians to step up and lead as well; be a wonderful time

J 0476 圧力をかけるんだと、それからまた、ロシア

E 0477 for the president of Russia to step into the Balkans and convince

J 0477 のほうでも、やはり、この、ロシアの大統領がですね、バルカン半島に介入して、

E 0478 Mr. Milosevic it's in his best interest and his country's best interest to leave

J 0478 え、そして、ミロシェビッチ氏に対して、その国のためにも、

E 0479 office. The Russians have got a lot of sway in that part of the world, and we'd

J 0479 彼のためにも、退陣したほうがいいのだと、そういう

E 0480 like to see them use that sway to encourage democracy to take hold. And

J 0480 影響力を発揮したほうがいいのだと思うのです。彼は影響力を持っていますからね、その

E 0481 so it's an encouraging election. It's time for the man to leave.

J 0481 影響力を使ってもらいたい、民主主義をもたらすためにです。そして定着させるためにです。

この「そういう影響力」を指すような照応関係は、原発言において見当たらない。E0476-E0479における先行発話 “be a wonderful time for the president of Russia to step into the Balkans and convince Mr. Milosevic it's in his best interest and his country's best interest to leave office.” から、ここでブッシュはロシアの対バルカンの能力は、アメリカのそれと同様のことができる資質を備えていると認めていることを、この文脈から ad hoc concept として導出したものとするのが妥当であろう。そこで、この「そういう」に「ロシアが圧力をかけ、ミロシェビッチの退陣を要求する」を指すように聞き手に促し、関連性を高めつつ、訳出表現の有意義性を確保している。

(18)

E 0889 companies support Governor Bush's prescription drug proposal.

J 0889 今回もその私は 遊説でも そうですね。 例えば多くの

E 0890 They oppose mine because they don't want to get medicare are involved,

J 0890 製薬会社は ブッシュ氏の その 処方薬の案を指示しています。

E 0891 because they're afraid that Medicare will negotiate lower prices for seniors,

J 0891 というのも 私のを彼らは嫌っているんです。とい

E 0892 seniors, who currently pay the highest prices of all.

J 0892 のは メディケアー で そういう ふうになりますと、今もっと高い

E 0893 [L]: Governor Bush? [B]: Well, I've been standing

J 0893 お金を払わせている高齢者に、 安い費用で渡さなくて

E 0894 up to big Hollywood, big trial lawyers what was the

J 0894 はいけないと思っているからです。 [B]: ハリウッド あるいは

J0892 の「そういう」に相当する照応関係も原発言には見当たらない。この「そういう」が指すのは、E0889 の “support Governor Bush's prescription drug proposal” と E890 の “They oppose mine” から導出した「ゴアの処方薬に関する案が可決される」という ad hoc concept ではないかと考えられる。この「そういう」は、聞き手にとって先に述べた ad hoc concept が最も呼び出し可能性が高いと考えるのが妥当で

あろう。また、この照応関係を敢えて言語化することによって、ブッシュ案が高齢者に与える影響を際立たせる解釈を促すことで、関連性を高め有意義性を確保すると考えられる。

5.2.2 Summing-up Reference

前段階で述べられている命題をまとめるために「そういう」を用いることで、また、聞き手に「そういう」が指すものは先行する命題であるとの正しい文脈選択を促し、関連性を高めることで、有意義性を確保しようとするものである。注意しなくてはならないことは、先行文脈で述べられているものをまとめるという意味では loose reference と共通するものの、「そういう」が指すのは loose reference は名詞（句）、summing-up reference では命題ということである。

(19)

E 0561 campaign trail I see people who -- moms and dads whose son or daughter may

J 0561 に関しては、我々は警戒しなくてはならないような兆候がみま、みられます。

E 0562 wear the uniform, and they tell me about how discouraged their son

J 0562 私が遊説に出ますと、その自分の子供達が この兵士になっているような、

E 0563 or daughter may be. A recent poll was taken amongst a thousand enlisted

J 0563 お母さん、お父さんたちが、 まあ、最近は、非常にあの自分の子供達、

E 0564 personnel, as well as officers, over half of whom are going to leave the service

J 0564 その兵士達が 心配しているだとかいうようなことを言っています。 勇気を失っている

E 0565 when their time of enlistment is up. The captains are leaving the service. There

J 0565 士気がなくなっていると、もう半分ぐらいの人たちが、もう自分の任期が終わったら半分ぐら

E 0566 is a problem, and it's going to require a new commander- in- chief to rebuild the

J 0566 いの人たちが軍を離れるんだと、そういうふうにいるんです。そういう調査の結果が

E 0567 military power. The other day I was honored to be flanked by Colin Powell

J 0567 出ているんです。やはりその司令官が、 軍隊を強化するために、 新たな

J0566 の「そういう」のに対応する照応関係はここでも見当たらない。この「そういう」は、先行する「兵士の士気の低下と退役率の高さ」について原発言で述べられ

ていて、それに応じて訳出した命題をまとめて指していると考えられる。「そういう」の前では引用の終助詞「と」を訳出しているので、それが世論調査の結果に帰属することを示していることから、その命題の呼び出し可能性は高められ、同時通訳者はその世論調査の具体的な結果を高めようと意識したものと思われる。

(20)

E 0963 enough. Too many people have been left behind. We have got to do

J 0963 一番 今、いろいろと雇用についています。2200 万の 方々の雇用を

E 0964 much more, and the key is job training, education, investments in

J 0964 生み出しましたけれども、十分ではない。 そのためには我々教育と

E 0965 health care and education, the environment, retirement security. and

J 0965 投資と、 それから、その色々、訓練だとか、 そういうことを

E 0966 incidentally, we have got to preserve Social Security, and I am totally

J 0966 していく必要があります。

ここは雇用対策について述べているところである。ここでも J965 の「そういうこと」に対応する照応関係は原発言中には見当たらない。ここで対応するのは、「やるべきことはいろいろあって職業訓練、教育、健康と教育への投資、環境、退職後の手当てなどが鍵となっている」という原発言と、それを訳出した先行する命題である。ここでも通訳者は「そういう」が命題を指すと解釈するように聞き手へ文脈の選択を促し、どのようなことが必要とされているのかを際立たせ、関連性を高めて有意義性を確保していると考えるのが妥当であろう。

この *summing-up reference* は特に原発言の動詞を通訳者がリテンションして文末で訳出する際に多く用いられる。例えば (19) では E563 の “A recent poll was taken” を聞いて、通訳者はこれを *suspend* させると同時に「どのような結果が出ているのかについてその答えをこの先述べる」との期待を特定化することができたので、トップダウン式に解釈仮説を立てつつ、訳しているものと思われる。そこで、世論調査の結果内容について訳し終え、照応関係を構築し、その調査結果を際立たせようとすることで関連性を高め有意義性を確保している。これは (19) でも同じことである。

6. まとめ

本稿では、同時通訳者が独自の判断で構築した照応関係「そういう＋名詞（句）」について、実際の同時通訳データを用いて具体的に検証した。まず、照応関係の同定に

関しては、新たに関連性理論の枠組みから呼び出し可能度と語用論的容認可能度を使って、その解釈は明示的発話内容、文脈情報、認知効果の複数同時的な相互調製であると統一的に説明できることを示し、さらに何を先行詞として指すのか、より細かい結果を得ることができた。

また、本稿では新たに、同時通訳も引用文や翻訳と同様に関連性の枠組みからメタ表象のひとつであると提案した。ところが、同時通訳は原発言を忠実に理解し、オンラインでそれを変換して言語化することから、同時通訳における言語理解には船山（2000）の言う「有意義性の確保の原則」という概念が不可欠であるとする事で引用文の解釈や翻訳の解釈との違いを特徴づけ、原発言理解のどのような側面に「有意義性」が貢献するのか、データ分析を通じてより詳細に分析した。ただし、「有意義性確保」の妥当性を論じるに当たってはまだまだデータの収集が必要であり、それが今後の課題である。

著者紹介：南津佳広 (MINAMITSU Yoshihiro) 大阪府立大学大学院 博士前期課程在籍。
同時通訳における発話理解の諸問題を、おもに語用論の観点から研究中。E-mail:
<yminamitsu@hcc1.bai.ne.jp>.

[参考文献]

- Baker, M. (1992). *In Other Words: A Coursebook on Translation*. London: Routledge.
- Blakemore, D. (1992). *“Understanding Utterances”*. Oxford: Blackwell.
- Blakemore, D. (2001). *“Discourse and Relevance Theory”*. *The Handbook of Discourse Analysis*. Eds. Schiffrin, D, D. Tannen & H. E. Hamilton. Oxford: Blackwell, 100-118.
- Carston, R. (1996). *“Enrichment and loosening: complementary processes in deriving the proposition expressed”*. *UCL Working Paper in Linguistics* 8, 61-88.
- Carston, R. (2002). *“Linguistic meaning, Communicated Meaning and Cognitive Pragmatics”*. *Mind and Language* 17(1-2). 127-148.
- Чернов, Г, В.(1977). «Еще раз о схеме организации синхронного перевода». *Теория переводчика*. № 14. Москва. Международные отношения, 51-59
- Чернов, Г, В.(1987). *Основы синхронного перевода*. Москва. Высшая школа.
- Giora, R. (1997). *“Discourse coherence and theory of relevance: stumbling blocks in search of a unified theory”*. *Journal of Pragmatics* 27, 17-34.
- Gutt, E.-A. (1990). *“A Theoretical Account of Translation without a Translation Theory”*. *Target* 2 (2), 135-164.
- Gutt, E.-A. (1998). *“Pragmatic aspects of translation: Some relevance-theoretic observations”*.

- The Pragmatics of Translation*. Ed. H. Clevedon, 41-53.
- Gutt, E.-A. (2000a). *Translation and Relevance: cognition and context*. Manchester: St Jerome Publishing.
- Gutt, E.-A. (2000b). "Translation as interlingual interpretive use". *The translation Studies Reader*. Ed. L. Venuti. London: Routledge, 376-396.
- Noh, E.-J. (2000). *Metarepresentations: A Relevance-Theory approach*. Amsterdam/Philadelphia. John Benjamins Publishing Company.
- Setton, R. (1998). "Meaning assembly in simultaneous interpretation". *Interpreting*, Vol. 3(2), 163-199.
- Setton, R. (1999). *Simultaneous Interpretation: from pragmatic and cognitive perspective*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Shilesinger, M. (1995). "Shifts Cohesion in Simultaneous Interpretation". *The translator*. 1(2), 193-214.
- Sperber, D. (1994). "Understanding verbal understanding". *What is Intelligence?* Ed. Jean Khalifa. Cambridge: Cambridge University Press, 179-198.
- Sperber, D. (2000). "Metarepresentations in an evolutionary perspective." *Metarepresentations: a multidisciplinary perspective*. Ed. D. Sperber. Oxford: Oxford University Press, 117-137.
- Sperber, D & Wilson, D. (1986/1995). *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell.
- Vehmas-Lehto, I. (1991). "Cohesion flaws in translation". *Empirical research in translation and Intercultural Studies*. Ed. S. Trikkonen-Condit. Tübingen: Gunter Narr, 171-183.
- Wilson, D. (1998). "Discourse, coherence and relevance: A reply to Rachel Giora". *Journal of Pragmatics* 29, 57-74.
- Wilson, D. (2000) "Metarepresentation in Linguistic Communication." *Metarepresentations: a multidisciplinary perspective*. Ed. D. Sperber. Oxford: Oxford University Press, 411- 448.
- Wilson, D. & T. Matsui. (1998). "Recent approaches to bridging: Truth, coherence, relevance". *UCL Working Papers in Linguistics* 10, 173-200.
- Wilson, D. & D. Sperber. (1993) "Linguistic form and relevance". *Lingua* 90, 1-25.
- 船山仲他 (2000) 「同時通訳の認知的側面を構成する要素について」『同時通訳における情報フローの認知言語学的検証：平成 10－11 年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（2））研究成果報告書』大阪府立大学総合科学学部：3-26。
- 船山仲他（編）（2002）『同時通訳における対訳遅延の認知言語学的研究：平成 12－13 年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（2））研究成果報告書』大阪府立大学。
- 水野的（1999）「機能的翻訳論への序章」『通訳理論研究』15号 通訳理論研究会：50-77。
- 西村友美（1999） 「時差通訳のストラテジーと言語認知」『京都橘女子大学 研究紀要』

26 京都橘女子大学：69-84。

小倉慶明・三島篤志（1999）「放送通訳をめぐる諸問題」The JASEC Bulletin 8 (1)：1-10。

内田聖二（2000）「定冠詞の機能－関連性の視点から」『言語研究における機能主義－誌上
討論会』東京 くろしお出版：105-124。